



道二翁道話四篇 上

七

9
3406
7



9
3466
7

櫻井

櫻井藏書



龍

龍

道古四篇

甲

故
櫻井理行
大正十四年
十月五日
櫻井之介
寄贈

命之謂性也。性之謂道也。道之謂身也。身之謂家也。家之中澤
莫ひうけしむ。此玉成以之。
應う先う出せよ。家中澤
翁の夜ふ日。呼吸スルふも
人をおく。後セるも唯木の

玉成道の記光うを此さそ
君を天とく。父成父とく
夫婦兄弟朋友よりをくそ
有情非情ふるも皆見
之の岐をこの次くを世界

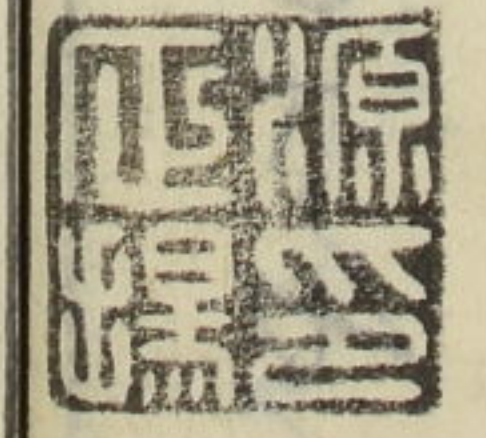
一 女人中和ナカヨシなるまきとのし

云ふこと致さるる返す

此四篇の述るる事

有子和任成之書

まああ淇水之人也



翁道話四篇卷上

浪華 八宮齋 輯



莫見乎隱莫顯乎微故君子慎其獨也中庸第一章

と云く物事隠るるを知らざるもその中悪い事やどを知らざるも悪事なればとて忽

知れることまひものしや和泉式部が表の疾乃

園いふやはし梅の花をこそかえ糸香やにかる

け香やの隠るるとはさちみり知るるもふて何乃

香の匂いと香が来るくとのふりやをた

とて嘯せませし尾籠るるはしなと堪忍

志くおぼるるも或茶屋の座敷で客がおやまと火
 燵に當りて捲んぶわる。肘は氣の毒なるや。出の
 ちれし乃ちきりりびとてか山が放屁とて山と志す。
 其くせ者のせぬのトやふうくひどい。か山も山
 と志ふ。けきとさだが動もはふトや。積袋く伽
 羅を出しぬ。そのと薫くまぎううさんと志す。そ例
 よわる座敷が鼻とひこくして。やんどこぞけ造う
 本薬屋もけりませぬ人か山が何とし人座敷
 がいどふや。本薬屋も薫えやうる嗅がいにしは
 どのふ。天地のゆるるのトや。屁を敷は屁の白い

洗香を洗香乃白いと香が素て洗法も何とぬ
 うるものトやうい。隠さううり恥るるのじ。隠と
 むいるぬ是トやよすのト腹の中は換と換て並
 びと。どろと子も懺悔して仕也るも懺悔とい
 腹の中乃洗濯悪人首切まて仕也(が罪が乞ひ
 て成佛と成持のぬ)のトや。飯喰ふ法の棚本
 仕也ふやうるまておるのトや。まよすつて君子の
 腹の中。目くも新に掃除がよいので洗濯なけ君
 子の後の中をたて入て見せが洗濯る白紙の中う
 りので。其白紙よりあつと鬼の毛の先やでも。雲

志すよのトや。瀬戸門の奇麗な掃てらるる所へは。ち
 とふたが小使もとるものトや。い。又志すよくで不
 掃除る所へは。ち。とま。く。の塵埃捨る。其
 白飯がくさると虫が漏る。飯のまるふるぬきた。又
 ござふ飯乃くさると虫が漏る。結てぬる
 ので。ち。の。先で。合点なされ。ま。ひ。災難
 外。素やせぬ皆腹の中。は。出。て。捨
 きよせ。のトや。指を汚悪い中。ゆるる。後てぬる
 のを。能。智。市。が。あ。ら。い。と。い。て。は。さ。く。ゆ。こ。
 藤。じ。の。し。て。こ。ぬ。り。と。ま。貴。今。日。の。つ。そ。控。也。

体。て。芝。居。見。又。好。悪。い。中。の。ト。や。と。何。な。ら。う。り。眼
 んでぬる。向。の。悪。い。の。ト。や。う。の。け。方。の。腹。の。中。は。智。と
 市。と。合。一。て。ぬ。る。中。は。出。て。ま。さ。ら。い。と。い。て。は。さ。く。ゆ。こ。
 指を汚る。向。の。悪。い。の。ト。や。う。の。け。方。の。腹。の。中。は。智。と
 市。の。の。い。は。い。の。人。の。あ。い。今。夕。ら。よ。が。い。ち。が。ご。ご。り
 また。若。勞。な。う。は。出。席。下。さ。り。ま。せ。と。ご。ま。あ。ゆ。ゆ
 ち。の。け。い。と。て。結。う。ま。る。の。で。皆。腹。の。中。の。ト。や
 ぞ。又。女。中。方。な。と。鏡。又。向。の。け。方。の。腹。の。中。は。智。と
 ち。の。け。い。と。て。結。う。ま。る。の。で。皆。腹。の。中。の。ト。や
 粉。ま。ま。ご。う。よ。う。の。と。ま。を。吟。味。する。の。ト。や。こ。ま。

皆うその親いとや

祈りては語らばこそあるしうと人の心よまことなけしは
 け方と燃がらぬ。親をうけさる親をのけさるうら
 け方の心も難し。親の命り執るのトや。父は執りてや
 叔父とねえ。父は出せがましくばる人。大率親たるは。是
 なるうでりよふい。立身出世とるのよ遠い。家の
 安令と高貴。親高し。子孫長くと籠りてつら。く
 け方と執りていふ人。とや。何でも。執りていふ遠い
 まるい。け方とよふし。又親のうら。由エカ。我ホハ。さ
 せん。孝親の位と。めあるい。と。さ。ん。ご。と。ろ。が。そ。よ

トや。うの。親子ハ。一世と。ら。ふ。く。天地。は。く。人。限。り。心。ハ。一。世
 ト。や。さ。ら。よ。う。つ。て。け。方。と。由。エ。親。由。様。大。少。の。け。よ。父。母
 の。由。送。神。ト。や。和。論。語。又。友。の。朝。綱。の。日。双。親。む。じ。と。之
 ども。我。身。則。又。父。母。の。送。神。さ。ま。い。事。々。物。々。父。母。の
 け。い。ま。て。茶。を。飲。も。ゆ。と。喰。ふ。も。父。母。の。御。行。儀。さ。ま
 だ。一。言。一。行。も。欺。く。ゆ。は。し。我。身。又。一。息。乃。あ。い。と。も。
 我。心。よ。と。ろ。ろ。ゆ。は。し。と。け。り。大。神。大。切。よ。せ。る。や。う。ぬ。と
 と。又。か。又。又。合。息。の。由。方。が。あ。る。か。あ。ら。ど。そ。う。ト。や。け
 方。が。由。又。親。又。換。ま。る。や。よ。う。つ。て。は。し。が。酒。と。飲。み。い。や
 ぶ。ん。が。由。又。親。又。様。の。お。ろ。ト。や。是。と。よ。ま。ん。が。孝。親。ト。や

ころくも吾け申うは仕事乃仕とむらひは親
 乃は退屈なるこのトやとくくは博愛が
 打といとくは利又母の遠侍るは博愛と打
 若くトやとくくは博愛の始りトやまてま
 仕也と蔬のうてお例死せやうぬ大の親は様
 方又蔬ううとと若くはいつぬ身能養膚これと
 又母又受教て毀ひ傷らるは孝初の始りト身
 まくるを好い各は後世は揚てひて又母を敬とは
 若の悔とまは蔬のうてたまりのうけ若遠が
 りのトや親と大切とくくは博愛の親

此様が昼寝をくごごるを鼻の端は蚊が刺してぬる
 息子皮毛と見く大き小後と立て大幸の親又様の
 鼻を喰ふ盗賊めと例る割本をひてひま申うと
 しく蚊を遊て親は様の鼻をくくらすとたき碎て
 のけさららぬいのうて仕也とけ申うなるが
 けり来てはなけと面白い嘲一おや世界の難
 儀とくくは申うなる始るよひりて悪いので
 も一遍は片よる付いなるなるのよめく仕也と
 くる期にしらんく月もあてとるうけは又ぬ人
 くののを起せばその切徳よめくけて盗しく

且形一まは功徳なるやうよあふ心得遠ひが
奉るこつひのトや教よまらぬさるい
賞物の懸理み重切。賣物もる利を貪り。人の汗
あぶらを何れ免く。家内を多し大さる執して奉
忌法奉勅むらま。皆親先祖の稟むしらすと
きんごいてぬるのトやぞ人まよふくは疑よ
しでも不実なるやうある。由は親は様方と地獄
乃令へ実為凡のトや。罪狀なるやういふ。又刑の
執ひ三々。罪不孝より大なるは。故又曰く。新よ
我く競くと。さけぬは。激を勅め。好より外

人の及る。鏡ようげのうらる。白眼はあつと。
笑へまら。鏡ようげ。私心なる。是則鏡の徳ま
白眼付て鏡と見る。笑ふ。執の。後方の。鏡の。他
りの。とらふ。乃トや。不忠不孝して。社会よく。高
貴不精。して。不忠不孝。して。自。延
命の。諸。法。体。就。と。津。佛。なる。化。りの。とらふ。の
志。や。跡。く。小。云。が。出。来。ま。や。う。ぬ。免。南。向。ふ。又。用。ま
ふ。い。で。け。方。乃。勅。め。よ。あ。る。の。ト。や。尊。徳。なる。の。所。あ。る。
極。樂。なる。け。き。や。ど。お。い。し。勅。め。て。い。う。る。を。か。り。たり。
と。み。難。い。所。あ。る。や。腹。の中。よ。む。じ。い。の。の。あ。る。や。

心ごとく涙のるふるひるはわづらひとてし神や守しん。
故よ君も其ひとりを懐しむ。老方江州宮宮と
つゝ宿りて。及話の由ざりはしれたる時。挑灯燈の長八
とらふ人が若洲をばてけ。獨を懐めを執めらまきさう
て由ざりまは。是の親由様が後妻を入きてり。親子
喧嘩が始り。に及年終り。往因ヶ切てあこりトヤ。
それ若訓をばて。扱ひ難い。や。いとま人
とせまき。け申う。親子一生不和で。養ひとらふ人の
る。はちの事トヤ。大く猶の換。親子喚合とらるとい
何のゆぞ。さそく。いとま。はし。いと。始りて。目が。是

こま。う。と。う。く。滝。云。仕。負。せ。是。が。向。か。ま。つ。代。一。生。
の間。滝。云。仕。通。一。の。外。ト。ヤ。を。我。ひ。と。り。と。つ。じ。む。の。
ト。ヤ。又。親。又。滝。云。と。ら。い。借。後。の。滝。云。と。は。遠。く。て。大。
神。仕。よ。い。り。の。ト。ヤ。あ。い。多。れ。と。心。学。の。カ。が。ら。い。と。滝。云。
仕。通。一。の。外。が。出。来。懐。ひ。け。奉。心。を。知。は。と。ら。い。の。難。
し。ので。人。の。天。地。の。活。て。あ。る。の。ト。ヤ。と。ら。ふ。事。が。難。い。
知。ら。る。所。意。り。た。く。必。し。な。く。圓。し。る。く。我。は。し。且。
あ。く。天。憲。の。き。り。く。う。血。先。ま。ま。ぐ。天。何。カ。い。や。
は。時。外。り。と。ら。物。せ。く。と。ら。な。り。り。竟。業。の。る。い。孝。悌。
の。け。外。は。い。し。り。我。い。か。い。我。が。な。ま。ま。は。出。さ。と。ら。い。

よき者よぬとめてしき者てもうろくえとつぐ且那どのく
 為付あがるんと家内諸もいりてどほしの長き後
 欠落か教が内まらう娘やる後世もやまらう曰
 人のるらりや飽まを喰ひ腹もあて遺居して教
 きたい禽類も進しをけごりの中問ドやそを教
 でも押のまじくが家業を情おひやう。若きまはあつ
 鳥もさうの雀や鳩がつお高貴り合ぬといふてあふと
 嘖このまらひ。狸や狼が神乞も出さうもさういふやふよ
 けいけ衆もらよ教いへぬわう。晩まを押のまじくが
 万とやう。雀の雀鳥の鳥ちうくわうくと情おひ

勅る申うはわぬ鳥が情人もあけらまよは法もな
 いぞ忠孝乃二ツを。わら尻までが進めておらよま
 とくいあぶといのい人トやまゆ人由世活なまら
 ドやよまの教よすうまらぬ又け長八反の
 朋友が又六人もいり。其衆達の禅法を修禪く
 押まぐくとも鼻る連中トや皆能。法を得
 るべしや。け禅法といふて大切なりトやま
 を悪くせ廢るといふけもなはいもろよあく耳
 んて鼻のむやうなるのなううのふと樂にしてわ
 しのがわら。三長八反がどよどけ方のる人引入と

さま。何と見が女房子よ見せらう。後女といふや。恥
しいのどやぞ人。是も大人。或る付むりぢやるい。
平者何がもけやうなるや。いものどや。親は様が咄
しや。パイとのみ。性いよ。今やと用がご。りま。れと節
又教する。年。考い。気が。らうい。用が。らうと。ま。い。やい。
と云し。や。る。ソ。コ。デ。は。の。内。さ。ら。う。の。西。側。な。し。節。又。教。する。ま。ら
ら。腹。く。節。又。教。する。工。合。剛。い。もの。ど。や。佛。家。で。い。け。節
又。教。る。を。地。獄。と。云。又。節。又。出。る。を。極。樂。と。い。ふ。何。中
庸。の。中。ト。や。又。至。善。の。地。と。云。心。の。本。神。し。や。上。天。の
の。夢。は。は。し。真。も。は。し。目。より。ろ。く。の。石。津。を。見。て。

心よりろくろ石津と見れば。胸の中より。換り乃
が別じら。今。迷。て。見。て。も。鳥。の。運。し。後。向。し。と。の
や。又。迷。て。い。て。も。水。の。寒。し。火。の。熱。し。又。分。別。迷。い。を
止。めて。見。る。も。中。の。ろ。く。火。の。熱。し。水。の。寒。い。け。こと
なり。迷。ひ。の。妄。想。を。や。め。し。心。よ。石。津。と。見。ぬ。と。れ。い。
る。る。系。又。神。と。す。り。八。百。葉。の。神。達。と。神。集。又。い
つ。り。給。ひ。神。儀。と。さ。う。り。給。ひ。て。た。だ。と。と。考。へ。と。さ。ふ。と。
い。の。ろ。ふ。や。吸。け。の。刺。へ。来。て。お。り。何。の。ろ。ふ。と。さ。ふ。
た。だ。と。考。へ。て。お。り。ま。い。の。ど。や。又。天。窓。が。障。い。と。さ。ふ。
お。が。給。て。搔。て。お。り。右。の。お。と。用。が。あ。る。と。左。の。お。が。教。て

わらむがしらむと結てかくまひぬるを左右はよめり
念をいひはしむるに眼を閉じし心は何ぞいひ出さ
初しといふもあまは足が働てあり。律用一教が密
備はし。身と心と合一して天地自然の御相是則今
日のる道の即今の上明らう也。今日の結攝は御天
氣換てござうまはたを換てござうまはといひてま
まわらむぬ先う。よい天をいひ知してはるものよけ
と名にいひ知しむるに今日天地のけは女なりを
を説法とすのトやまが念心念念の奉佛の御説法
少しも思ふを別はして節はあがりてあり。世の中の

愛り愛ふ事も法を説き三む世間が老後法一や。又雨
の降日今日天をいひてござうまは誰もおもひて若
い。人のる遠くてありまは天地が合点なるも取人
とて人おておて通用が出来る。又何が知してござう
とく。ちろと教形の不出来る人をいひて。おまは換の教
まはさるるの教はとらむるにござうまは。知してござうまは
とど。とんまのりのでし腹立ちを若くや。天が人乃心ま
よめて天と悪し。より傍らうとる由人の換る愚た
し。のでし腹立ち。盗人と盗人とつひの知してござうまは
後立ち。様まを様まといひて。日ごとくまは。まは。小人を

小人よりよての腹立ぬ我のせいのいとよくある。かま人の
 教をきたるん教をよとよてありのトやもきど。何れも
 ぶつたよある。まよよの教でいふ義不るをゆひる
 が。心よははじいよのやど悪悪善根を能く陰徳と積
 きのドやとよてあり。盗人が飛でい盗してありか
 の肉でいほいよのやど利にる者トやけやうる繕捕な
 幸とまよびよある。世間の人まぬいよのまよとよよ
 わろとほぐよので毛が心とひて飛の殺し。かまがま
 人を得ふよ。丁推が度安よ居り。止那度が豆腐若
 提うり。たむこまよの掃除するのトや。家創が木の獄雲
 の母よまぬくまけがまよぬソテ神佛尊人様方々の
 毒よとよて。教をゆえるまよまよ。け心と飛と一掃する
 身を能合息せよまよ。そ一掃する心と飛と引き
 へく。まよ天の功開方々の身をまよしめまよ。あつて人
 よは微塵いさうと私心といふものつるい幸とまよ
 あり。生まぬ先く。天の靈明我よ体りてあり。身を
 まよさんあよ古の明德を天の明くよせん。秋と
 ろうあよまよ。如き梅がさく。秋よるれが掃が出来。衆
 の本に掃り出まぬ。人の孝悌忠信のよ。け佛知見を
 開しめん。あよまよ。せん。出現したるのトや。うろくまよ。

まばどうもなるぬ。人を突例してし金とけり
中しよとまぐきんけしむけ。提婆もせく世地獄
谷金焦ほむりるぬ。まとは石使るりちやふ
う。どうぞ大哀大悪と死し。成佛にして成りな
さうませ。何れもむりしうらやるの。三界唯一
心とらふて。天地のふたつ二つの滋を成知りな
う。あつとや

徳徳師胸よりけたる人。恥若佛出さる。息と出さる
三界より二つ滋う。親善を出さる。提婆と出
さふと。御辱次第。好次第。や其滋が天地も

善出さるのゆへ。天地のふたつ二つとちう二つと
く。目もちう鼻もく。親も親もまことしめる
と忠信孝子の影しと守て。感心しうまりて。成
るが。又不義不孝の影しと守て。何となく
哀し。心せざる。善と性文性。善なり性
順人の。及ぶや。け外も教の。ぬ。非るも成る
とけ外もなるの

道二翁道話四篇卷上終

